

# 「ミャンマーの国立リハビリ病院とヤンゴン子ども病院へ送るプロジェクト」 現地活動報告（2015年3月10～15日）

片野 智之

2012年11月に始めたミャンマーへのプロジェクトはその実績と効果を踏まえて、今回2回目で国立リハビリテーション病院とヤンゴン子ども病院に各々45台を届けて、その引渡し式を3月11日はリハビリ病院、12日は子ども病院でそれぞれ保健省幹部、日本大使館参事官、病院関係者、現地NGO、それに母親と子どもたち80名以上を招いて実施しました。

ミャンマーには子ども用の車椅子はなく、病院関係者でも初めて見て機能的な日本の車椅子に驚いていました。2012年に届けた車椅子の維持管理も的確にできていました。

日本大使館としても継続的な人道支援事業になるよう期待し、現地関係者の要望に応えたいと表明されていました。

## National Rehabilitation Hospital （国立リハビリテーション病院）



国立リハビリテーション病院入口

保健省次官代理のスピーチ



式場では代表の家族にすでに適合確認した車椅子を渡しました



国立リハビリテーション病院には 10 名の物理療法士が日本の技術指導を受けて治療にあたっており、引渡式までに車椅子のフィッティングも終えて当日 21 名の子どもたちに貸与しました。



喜ぶ母親たち



大きな声を出して喜んでいる子どもたち

## Yangon Children Hospital (ヤンゴン子ども病院)



### ヤンゴン子ども病院と脳神経科の入院病棟

大人用の車椅子が1台あって搬送用に使用っており、当会の車椅子を病院内で使用することを認めてほしいと要請され、もちろん多くの子どものために活用するようお願いしました。



保健省からの感謝状を受け取る      パワーポイントで当会の主に日本での活動紹介

当会は同じ境遇の日本のとミャンマーのお母さんとの心の橋渡し役であることを話しました。





はじめて車椅子に乗ってうれしそうな子どもたち



ウォーカーや歩行訓練器は病院でも容易に入手できず、次回は多くと送ってほしいと切望されました。

## 家庭訪問レポート (2012年に届けた車椅子の追跡調査)

2012年11月の貸与した車椅子が実際家庭でどのように使われているか、維持管理は適切にできているか、どのように家庭の生活が変化したかなどを検証し、当会プロジェクトの評価するために今回、リハビリテーションのPT責任者に同行してもらい、4軒の家庭を訪問しました。

1軒目のピオン君の家庭へ行ったら、車椅子がピカピカ、タイヤの空気も十分に驚きました。実にきれいに使っており2年半も使っているとは見えません。

リハビリセンターにはバスで行くので車椅子は使っていないようですが。



ポーラメン君 6歳

家のつくりは質素な作りですが、中はきれいでごみもおちていません。ミャンマーの人々は清潔好きです。



ジェーセン君 8歳

彼は車椅子のお蔭で背骨も発達も正常になってきて、少しずつ歩けるようになったそうです。父親は当方の訪問を待ち受けて、お礼の印だとミャンマーの壁飾りをいただきました。来訪者を喜ぶそうで元気ではしゃいでいました。もちろん車椅子はきれいに磨かれていました。



メンテックパイ君 6歳

ミャンマーの人は車椅子が20万円もすると聞いたら、家の財産の中で1番高いのも  
もったいなくて使えないので家の中で飾る家庭もあると聞き、考えさせられました。  
メンテックパイ君はあまり外へ行かないと言うので、子どもの健康のために毎日車椅子  
で外出するようにお願いしました



ミャンマー語で**功德**を「クドー」という。彼らの日常生活の中では、恵まれない人へ寄付や施しだけでなく、相  
手を思い自分でできる範囲でするたくさんの功德であふれています。

ミャンマーの85%は信心深い仏教徒で、子どもの時から修行して仏の教えを学んでいます。

「いいことと思ってやれば、結果はどうであれ、それが功德だ」と僧が説いていました。

自分にとって恥ずかしくないように生きていく人々の暮らしには優しさがあふれていました。

我々の活動も多くの支援者に支えられた**日本の功德**だと誇りを張って活動していくために、  
相手を思う心を忘れないように努めたい気持ちを新たにしました。

## 国立リハビリテーションとヤンゴン子ども病院からの感謝状



今回のミャンマープロジェクトには日興アセットマネジメントと真如苑からのご支援ご協力をいただきました。90台の車椅子には日興AMのステッカーを張り、挨拶では会社紹介と支援いただいたことを伝えました。



ご支援ありがとうございました